

相馬黒光論

——「魂」の遍歴——

葛 井 義 憲

はじめに

抑圧と緊張の狭間で思いの丈を「魂の法悦」に向けた人、相馬黒光（星良）。彼女の醸したす生の光彩と陰翳は「アンビシアス・ガール」¹⁾、「悍馬」²⁾、蠱惑的女性³⁾、「ヘダカブラ」⁴⁾との眩惑的な魅力を有す、気のかった「妖精」のような印象を周囲に投げかけるものであった。これは彼女の気質と彼女を囲繞する境涯に大いに与ったものであろう。かかる奇しげなフェアリク特性を帯びた女性、黒光の「生の軌跡」は近代日本宗教史、又、同キリスト教史の上からも大相興味をそそる事柄である。彼女は「魂の充足」を求めて「この世」を漂泊した。苦渋する生の下で、救いの曙光を求めつづけたのである。筆者は以前、彼女を「文化人」として華麗に生きた個性豊かな⁵⁾女性と評したが、しかしその華麗さの底に払拭しえず、増殖する「闇黒の塊」のあったことを忘れてはいない。彼女はこの「闇黒」群に終生苦悶させられていた。それを如何に忘却するかに心労した日々。それと対峙することに意を決した時。それを克服するために血みどろの戦いを成した期節。この「闇黒」群との軋しみが彼女を「魂の遍歴」に誘う動機であった。しかし、私たちはここで、これをひとえに黒光一人の問題に収斂させてはいけぬ。これは「辺縁」に追いやられた人間が独自の個有な「人間」として生を刻む際に生じさせる「共通の巡歴」でもありうる。すなわち、黒光の「魂の遍歴」は「闇黒」を深奥に蔵す私たちの「心の漂泊」でもあるからだ。それ故、筆者は黒光の「闇黒」を照射しながら、彼女の「魂の遍歴」を辿り、そしてその「結実」を考察することの若干の意義を本稿に見いだす。

1 呪縛と夢想

星良（相馬黒光）は明治8（1875）年9月11日、星喜四郎、己之治の三女として仙台に生れた。父喜四郎は旧仙台藩士多田家に生れ、星家の養嗣子となって己之治の姉亀代と結婚したのであるが、亀代、産後間もなく死亡のため、妹、己之治と再度娶合わされて星家に止まったのである。喜四郎の父、雄記は松前町奉行、仙台藩評定奉行の要職についたこともあり、威容の備わった人物であったらしく、それ故、喜四郎は雄記に絶対服従で彼の意を通し、片隅で小さく暮していたようである。⁶⁾このように、星家において、雄記の存在は絶大なものであり、家族一同に相当な影響力をもたらしていたようであるが、父喜四郎は反対に、家族の中で影薄く、良自身も「父から感銘するものはほとんどない」と語るほどであった。そのため、明治17（1884）年12月、雄記が没すると途端に、星家は支柱を失って没落に拍車をかけていった。良はこの時期を回想して、「今は祖父なく、家に厳然とした存在を欠くと共に、女の力には限りがあり、時勢はいよいよ旧い生活をこぼさに急で、如何に気を張り詰めても支えるすべなく、ここに至っては軒も柱もにわか傾く心地⁷⁾でした」と記している。雄記亡き後も、星家を支える柱に父喜四郎はなりえなかった。『広瀬川の畔』（女性時代社、昭和14年刊行）に記された彼女のこの言葉より窺えるように、母己之治が雄記に代って細腕で一家を切盛していた。それは廃藩置県後、喜四郎が宮城県庁吏員、又、盛岡の会社員として家を離れて働いていたため致し方なかったことなのかもしれない。雄記没後、星家には厳然たる男の支柱はなくなってしまった。そして良はかかる「精神的支柱である父不在」の下で生きなければならなかった。これは彼女の人格形成に於て大きな意味を有していたことと思う。影の薄い、家族から忘れられがちな父。その父から感銘を受けることもなかった良。しかも、星家に絶大なる力を示していた祖父雄記からも、女子故に、直接に言葉をかけられずに度外視される寂しさを味わった彼女。良は精神の支柱、人生の先導者を欠如した状況の下で幼少より日々を過ぎなければならなかったのである。

彼女は『広瀬川の畔』の中で「何ものかを拝みたい子供⁹⁾」であったと記して

いる。「父」たるものと触れ合えない寂寥感と星家の没落していく悲哀の下で、彼女は凍て付いた心を溶かし癒してくれる「深い大きな魂の世界」¹⁰⁾への没入を自然と希求していたのであろう。灯明の点る仏壇の前で、朝夕、家族が合掌礼拝する友を羨ましく思い、又、教会の窓から洩れてくる讚美歌の歌声に涙ぐむ子供であった。

「ただあの讚美歌の声に満ちる法悦—無論そんなむずかしい言葉はまだ知るよしもないのですが—子供の眼がびたっと一つのものにむかってひらかれているような、その感激、何か常態を超えた光景に、強く強くひきつけられたのでありました。」¹¹⁾

幼き良は「日曜学校」で讚美歌を歌う他の子供たちを教会の窓の外から眺めながら、神を讚美する子供たちの姿の中に、彼女を憩わせてくれる世界のあることを感じている。豊かな彼女の宗教心と鋭敏な感受性は彼女を取り巻く境涯が苛酷であればある程、彼女を甘美な心慰める「宗教の世界」に誘っていく。彼女は自己を見守り支えてくれる「力強き愛の存在」を欲していたのであろう。彼女は「お祈り」が好きだったと語る。

「お祈りの時には、ほんとうに神様がみんなの頭の上においでになって、気高いお姿で皆を見ていらっしゃるという感じがし、ひとりでに敬虔に小さい頭を垂れました。」¹²⁾

「神に見守られている」という安堵が幼き彼女を素直に「大いなるもの」の前にひれふせさせる。「父」たる存在の欠如を「大いなる存在」で埋めることができ、心象風景の翳をその光彩で消し去れると感じとったのであろう。良は没落していく星家にあって、彼女の「魂」を癒すのは星家の「外」にある「何か常態を超えた光景」の中にあると見てとっていた。そして彼女を侵蝕する更なる寂寞と闇は「天性」の豊饒な宗教心と研ぎ澄まされた感性、又、周囲のキリスト者、叔母佐々城豊寿、親戚の多田家、笹川家、佐藤家¹³⁾の影響などにも与って彼女を「魂の法悦」へと一段と向わせていった。

明治20(1887)年10月初旬、良の姉、星蓮子が東京から仙台に戻って来た。同年10月17日に、東京に於て、矯風会会長矢島楫子の息子林治定との結婚を目前にして、蓮子は帰仙した。彼女は桜井女学校の寄宿舎で、矢島に仕え、薰陶

を受け、将来の嫁としての行儀作法を教え込まれていたのであるが、突然婚約解消になって仙台に帰されたのである。帰仙後、蓮子は「日ましに憂鬱が嵩じ、人を避けて一室に籠り、もともと黙っている人がますます無口になりまして、いるかいないかさえわからないように沈み切ってしまいました。母は心配のあまり、爪立ちをして忍びより、室の外で様子を窺ったりいたしました。そんな無口であった姉がある日突然笑い出しました。ただの笑いではございません。広い家の中に少なすぎる家族がはっと同時に顔色を変え、「ああ、とうとうきた」と、もうそれはたとえようもない悲惨な思いに突き落とされました。それ以来、母は狂女の介抱に夜の目も合わぬ身となりました。¹⁴⁾ 明治34(1901)年7月6日、蓮子没するまで、星家は「狂女」蓮子に苦悩したのである。良は姉の悲惨な姿に触れ、「姉の狂える魂の叫び」¹⁵⁾を聞く中で、矛盾に満ちた「大人」の作り出す「この世」に対して憤怒し、猜疑を抱き、苦渋していたのである。彼女は「暗い淵」を歩いていたその頃を思い起し、「私は姉が発狂してから笑わない子供になりました。¹⁶⁾」と回想している。姉の「発狂」は小さな良を押しつぶす程の悲哀に満ちた衝撃であった。しかも、明治23(1890)年には、星家の片隅で生きつづけた父喜四郎が回復の見込みのない肺癌になって盛岡の地より戻って来、又、同年6月には、弟文四郎が急性骨髄炎になって右足切断の手術を受ける出来事が生じた。没落の星家の下に、姉の「発狂」、父の病床生活(明治24年2月9日召天)、弟の障害者としての生活(明治25年6月26日没)という憂感の影を落した。

かかる悲惨な状況に於て、彼女は明治23年、14歳の折、押川方義より洗礼を受けた。¹⁷⁾ 彼女は教会生活を送る中で、ひしがれた「魂」の癒しを体験したのであろう。『広瀬川の畔』の中で、彼女は教会の中には、「憂苦のかげなく、まして不運をかこち、人を憤るような心持ちはかくされていない。貧しきものは福なり¹⁸⁾」ということを実感として捉え、心洗われる思いをもてたことを語っている。苦渋の重圧下で守る礼拝出席、牧者の語る説教、教会員との交りは彼女の「魂」を慰めるとともにそれを活性化させていった。彼女は「闇黒の淵」の下から、「遙か彼方に希望の太陽のかがやき¹⁹⁾」を見、その底から必至になって「向上を望み、新たな運命の展開へと心急²⁰⁾」がせる思いに狩られていた。彼女

はこの思いを次のように語っている。「機あらば母の翼の下から離れ去ろうとする、小さな事にも束縛を受けずに自分の意志で行動したい。」²¹⁾ 彼女は悲惨な中で押しつぶされそうになっていた「魂」の癒しから一步出て、「闇黒」を蹴って自由に束縛を受けずに飛翔する段階へと移ろうとしていた。

明治25 (1892) 年3月、良は暗い故郷、零落の星家を出でて、横浜に向う途中、憧憬の地、東京に一步をしるした。その前年、向学心に燃え、東京に於て羽撃くことを夢見る良に対し、母己之治は家の窮状にもかかわらず、なんとか彼女の志に少しでも応えてやりたいと考え、家より通学可能な宮城女学校の入学を許した。²²⁾ しかし、良は明治24年にこの女学校で発生した「ストライキ事件」にいささか関り、学校当局の首謀者五人(齊藤冬、石川梅代、町田辰、尾花梅代、小平小雪)に対する退校処分を不服として、明治25年2月退学した。この「ストライキ事件」の原因は「日本の伝統を無視」して、「アメリカ式教育」一辺倒をもって子女を教育する宮城女学校(校長、合衆国改革派教会、The Reformed Church in the United States)派遣婦人宣教師、プールボー(L. R. Poorbaugh)²³⁾の教育方針にあった。²⁴⁾ 彼女たちは「アメリカ式」という型にはめられずに、自由潑刺に一人の人間として、又、「良き伝統」を継承する一人の日本人として成長することを模索していたのであろう。それ故、「滅び行く故郷」²⁵⁾を悲嘆し、又、そこから脱出することを希求しても、彼女たちの存在の「基盤」である日本人を捨て去る思いは露程もなかったであろう。退校処分を受けた5名のうち3名、齊藤、町田、小平は明治女学校に、又、尾花は青山女学校に、押川方義の配慮の下で転入学でき、更に石川は押川の媒酌で松村介石と結婚した。そして最後に残った良は横浜にあったフェリス女学校に押川の計らいで転入学した。²⁷⁾ それは明治24年9月、同校教頭に迎えられた星野光多と押川との関係に与っていたのであろう。星野は同校着任以前、植村正久が²⁸⁾明治10 (1877) 年に開拓伝道を開始した東京下谷教会を牧しており、²⁹⁾そして植村と押川はバラ(J. H. Ballagh)の下で英語、聖書を学び、共にブラウン(S. R. Brown)塾に入塾した間柄であった。³⁰⁾ かかる経緯の下より、フェリス女学校への転入学が許可されていたのであろう。

良は同女学校転入学のために、3月東京に赴き、叔母佐々城豊寿の下に少し

身を寄せた後、4月横浜に赴いた。憧憬の地、東京でも、又、友たちの学ぶ明治女学校でもなかったが、彼女を迎え入れた同校は彼女の飛躍への渴望を満たしうる女学校であった。

「第1志望の明治女学校ではありませんでしたけれど、その頃のミッションスクールでは最高峰のフェリス女学校、一部の女学生の憧憬の的となっていたフェリスに入ったことは、いろいろの意味において私の満足であり、誇りでもあり³¹⁾ました。」

良は仙台の宮城女学校退学を憂うことなく、横浜のフェリス女学校に学ぶ喜びを素直に表わしている。彼女は学校の設備が申し分なく整い、しかも「西洋画」に点描されたかのような学校の佇に感嘆³²⁾している。栓をひねれば出るお湯、「本式ストーブ」、冷えきった体を温めるスチーム。水を吸い上げる風車、校舎の壁、タンクは赤色に塗られ、建物の窓枠のみが濃いグリーンに染められた光景。彼女は「暗い故郷」の外にあると夢見ていた「救い」の曙光をここに見いだす思いであった。

「世間ではフェリスは貴族的だという評判でしたが、私にはそういうふうにはみえませんでした。生徒の服装も綿服が多く奢ったふうが認められませんでした。ただその動作、そして服装にあらわれた色彩の好みなどは、ずいぶん西洋風で、それが教養につれて洗練され、一種のミッションスタイルができておりました。髪³³⁾の結い方、半襟の色なども一人々々みな異った個性を発揮していて、なんらの拘束なく、一見雑然としてみえるうちによく統一され調和されて、おのずと清楚高尚³³⁾でした。」

彼女の眼に映じるフェリス女学校の生徒は教養ある洗練された個性的な存在であった。彼女はこの学舎に身を置くことで、思いの丈を十二分に伸ばし、「希望の太陽のかがやき」の下に飛翔しえろと思ひ描いたであろう。けれども、明治25年6月26日の弟文四郎の死は未来へ天翔ようとする彼女の希求に色濃き蔭を落した。没落の星家を「切り捨て」て、自己の可能性を思う存分試そうとする矢先、「障害」ある身で懸命に仙台で生きる弟文四郎の死は人間の御し難い限界の悲哀を彼女に知らせ、又、「神も仏もない³⁴⁾」絶望感をも抱かせた。彼女は「弟の死は私の人生観を一変し、折々筆をとって書くものは悲観的とな

り、厭世的傾向が目立つ³⁵⁾と語っている。文四郎の死は忘れたい「暗い故郷」に彼女の心をひき戻し、希望へと前進しようとする彼女の決意をひるませるとともに、片足を失っても健気に生きる弟を死をもって「応え」る神の冷酷さをも感じさせたことであろう。彼女は信仰の喜びと懸命に生きる4歳下の弟の姿に支えられて「自己の輝ける明日」を求めて生を刻んでいた。しかし、その支えの一つが死という「残酷な」結果をもって清算されたとき、「不運をかこ」たず「魂」の平安をえる信仰に亀裂が生じたのである。良はこの時期、父喜四郎の姉兼（押川より受洗した篤信のキリスト者³⁶⁾）の嫁いだ佐藤家に連続して起った悲運に対し、「私はもう、神様の存在などはわからなくなった、揃いも揃って善良な人ばかりの佐藤家なのに、一人なし非業の最後を遂げるなんて、一体私たちはどう考えたらいいのだろう、未信者の人は耶蘇教を信じた罰だというし、教会の人達は、何事も神の摂理だという、私は何もかもわからなくなった³⁷⁾」と呻きの言葉を吐いている。

かかる信仰の動揺はフェリス女学校の規律、又、当時のキリスト者の「在り方」に対する批判へとつながっていった。『黙移』の中で、「安息日」には「バイブルに関する宗教書類」以外の本は一切読むのを禁じ、そして仕事を絶対に成してはいけないと語る上級生の言葉に不服を述べる箇所があるが、彼女は「律法」遵守を盾にとる寄宿舎生活、又、「何事も善と悪とできめつけてごちない³⁹⁾」「ミッション・スクール」の教育方針の下に、「魂の深い痛み」を知り、癒そうとする「愛」が本当に蔵されているのかと訝る。「闇黒」の桎梏から解き放ち、「希望のかがやく太陽」への旅立ちを促したはずのキリスト教の一面に、人間を「律法」をもって呪縛してしまう威力が包含されていることを彼女は感得した。しかも、それは「キリスト教」というよりもそれに「従う人々の態度⁴⁰⁾」に依拠増幅し、顕在化していくことをも知った。明治26(1893)年夏、良は帰仙した折、「東北救世軍」の結成者の一人、東北学院の学生であった木村清松の「貧民窟」における熱血的な伝道の悲劇的な結末を彼より聞くに及び、この感を一層強く抱いたと思える。彼女は清松の「白キャラコのじゅばん」に「この身体は、神と国のためならばいつ何時にても売り渡し申すべく候⁴²⁾」との言葉を墨で黒々と書き記して仙台を歩く姿にキリスト者の勇猛さを見

るとともに、又、頑なまでに自己を偏狭、固陋にしていく悲哀をもそこに読みとり、そしてそれに素直に承服しえない彼女自身をも発見している。

「ミッション・スクール」の偏狭さ、キリスト者の固陋さは彼女の中に信仰者への反撥と信仰の動揺を募らせていき、「魂の癒し」に苦慮させていった。かかる煩悶と懐疑の下で、彼女は帰横後、「激しい頭痛」に悩まされ病室に伏す生活を余儀なくされたのであるが、その年の秋、病後間もなく、小平小雪を通して星野天知（『文学界』の主宰者）を紹介され、そして天知の鎌倉の別荘「暗光庵」の蔵書を読む機会を与えられた。彼女は「学科以外の文学書類」を誰憚ることなく読み耽り、そして彼女の心奥に醗酵する想念を思うがままに書き綴った。自由に読み、書き表わすことが、一時、束縛より生じる鬱結を消去させ、そして「宗教に対する懐疑的悩み」をも消滅させることを発見したのである。しかも、この満喫は彼女に「自己」を偏狭にさせる「ミッション・スクール」やその寄宿舎生活から解き放つことをも促していった。彼女は当時を追憶しながら、「私の心は最初からそうであったように、また当然の帰結として、明治女学校のほうへ急速に走り、今はもう以前のようにその思いを抑えることができなくなっていました。」⁴³⁾と語っている。彼女はフェリス女学校での体験を通して明治女学校を眺めたとき、明治女学校はキリスト教主義であるとはいえ、「自由清新で、ミッション・スクールの型にはまった教育」⁴⁴⁾を成さず、しかも、「芸術至上の精神を実生活に織り」⁴⁵⁾込んだ女学校であった。彼女は再度、この女学校への思慕を募らせ、そして明治28年秋、そこに転入学した。

仙台在住中より憧れつづけてきた明治女学校への転入学は彼女の知識への飢えと「魂の渇き」に油を注ぎ、例え北村透谷を失い（明治27年5月16日歿死）、島崎藤村に昔日の才気煥発さを見い出せず、又、星野天知を鎌倉笹目ヶ谷に引き籠らせて、明治女学校に全盛期の翳の訪れを思わせたとしても、彼女を食欲なまでに勉学に、文筆活動に狩り立たせていった。しかも、藤村に代って新風を注ぎこんだ青柳有美の清新な英文学の講義、そして白熱した討論は若き良にこの女学校に生き、学ぶ喜びを堪能させた。しかし、彼女は束縛から解き放たれ、自由なる研鑽を成し、そして「大いなる理想」に向って邁進しえる未来をこの女学校で手にしたはずなのに、この時期、良は心の空虚さと錯乱した精神

状況に苛まれている。⁴⁶⁾ 彼女は自由で清新な明るい世界を現実に手にしたとき、故郷の暗さが、星家の悲哀が一層鮮やかに迫る思いを持ったのではなからうか。彼女は発狂した蓮子を、苦悩の中で死んでいった父喜四郎、弟文四郎を、没落した星家の下で懸命に働き生活を支え、しかも良の学費を工面する兄圭三⁴⁷⁾郎を、又、母己之治を断乎忘れ、捨て去ることができなかつたのであろう。それ故、喜びあふれる清新な世界は、反面、痛苦をもって彼女に「闇黒」を想起させしめたと思う。彼女は「大なる理想」を具体化させる明治女学校にあって、研鑽の喜びを噛み締め、励む中に、尚も満たされない「魂の渇き」、「魂の疼き」のあることを見出したであろう。「明るい世界」は「闇」を駆逐することなく、又、自己の力は「闇」と抗うにはひ弱であつたのかもしれない。

明治女学校への転入学はキリスト者の偏狭さ、又、「神の計らい」への懐疑に与って成されたものではあるが、彼女は「魂」を癒し、充足させしめる「大なるもの」を完全に抹殺するまでには到っていなかつた。良は「魂の渇き、疼き」が自己の力で満たし、癒しえないと気づきだした以上、彼女はその治療を求めて、再び「大なるもの」へと立ち戻る可能性を有していた。それは彼女の「東京復活大聖堂（俗称、ニコライ堂）」通いが端なくも物語っている。

「はじめてニコライの会堂に入って私のそこに覬ましたものは荘厳この上もない礼拝の姿、ほんとうに息も詰まるような宗教の絶対境、それが不知不識大芸術に合致して、恐ろしい程の魅力をあらわし、一度そこに足を踏み入れたものは、もうもとの気持では外に出ることは許されないのでございました。⁴⁸⁾

彼女は「あの青銅の瞑想的なドーム」の下に身を置き、神学生によって構成された聖歌隊の心に沁み入る合唱を聞き、体軀堂々のニコライの所作を眺めるとき、鬱屈した思いは晴れ、「大なるもの」に抱かれ「宗教的忘我の境」に憩う喜びを味わつたことであろう。自由に思索、行動を成せる機会を与える明治女学は計らずも彼女に「大なるもの」の下にある「もっと素朴な魂」の安らぎに気づかせ、しかも、人間の微少さ、人間の卑劣さ⁵⁰⁾をも教えて、「もっと真実に喰い入る」⁵¹⁾「求道」生活への喜びを知らせていった。彼女は素朴で謙遜な人間を希求する自己をそこに見いだしていた。それは『黙移』の中で語る、「大なるもの」にすがって、「真実一路、信念のゆるぐことなき生活に没頭」⁵²⁾

することであった。

2 田園生活の悲哀

明治29(1896)年2月、星良(相馬良、号黒光)に対する中傷記事事件は「世間」の嘲笑と指弾を彼女に浴びせかける結果を生みだした。しかも、彼女の東京での「母」代りでもある佐々城豊寿も国木田独歩と娘信子の結婚に苦慮していたため、姪の「失恋死亡捏造」事件に心碎き、心配するよりも不快を示すだけであって、⁵³⁾彼女は孤影悄然の態を呈すことになってしまった。都市社会で、女性が一人で「仕事(文筆活動)」をもって生きることの困難さを彼女ははっきりと知らされたのである。ただ、かかる苦悶の日々を過す彼女の周囲にも、彼女を温かく見守り、支える一握りの人々は存在していた。明治女学校校長巖本善治、遠く仙台にある母己之治、「穂高」の相馬愛蔵たちであった。相馬愛蔵は押川方義の門下島貫兵太夫を通して、明治28年に彼女と知り合い、彼女との結婚を真剣に考えていた。しかも、将来伴侶になるかもしれない彼女の醜聞にも動揺せず、彼女を信頼しつづけたのである。⁵⁴⁾この愛蔵の理解と信頼は彼女の心を結婚へと動かしていった。彼女は兄事する島貫より縁談相手として愛蔵を紹介された時は、未だ結婚を真剣に考えることもできず、又、結婚にも懐疑的であった。それは「結婚とは、紡ぐこと、生むこと、泣くこと」⁵⁵⁾でしかないのではないかとの「臆断」から生じていた。それ故、封建遺制から解放された一人の「人格」を有す人間として生きingことを求める彼女が、結婚でなく、彼女の「人格」を尊重し、しかも、蹂躪されることなく育み合える「恋愛」、⁵⁶⁾「プラトニック・ラブ」を描き求めていたことは至当であったと言える。けれども、中傷事件、文筆活動への挫折(彼女の習作的恋愛小説が中傷事件のひきがね)、都市生活の醜悪さ、又、親しい布施淡と加藤豊世の婚約⁵⁷⁾は頑な恋愛至上主義者の眼を結婚へと向わせていった。しかも、彼女は「謙虚な淋しい漁師や農民の生活」の中に人間として生き、憩える人間本来の生活があるのではないかとも考えだしていた。彼女の希求する「大いなるもの」に抱かれ、「真実一路、信念のゆるぐことなき生活」の場は自然に育まれて生きつづける彼らの生活の中にあると見ていったのであろう。

「何者か大いなるもの前にひれ伏したい、少しの技巧もない世界、深い大きな魂の世界、私の眼にはじめて自然がその大いなる誠の姿をうつしてきました。そして漁夫や農婦の生活に深く心をひかれ、晨に霜を踏んで出で、夕に星をいただいて帰る、謙虚なさびしい彼の⁵⁸⁾人々の生活こそ、やかましい論議を越えたほんとうの信仰の生活ではないか。」

彼女は傷つき、苦悩する日々を追憶しながら、若き良が「自然」の下で、家族同士日々協力し合いながら、素朴で平凡な家庭生活を営むことの喜びに気づいていったことを語る。彼女は星野天地の「暗光庵」に遊び、由井ヶ浜や山々で目撃した光景を思い起しながら、「漁夫は銅色に日にやけて、妻も子も総出で助け合って網を引いていました。農婦は畑中の細い径で、坐って子供に乳房をふくませ、その夫は掘り出したばかりのいもを焚火にくべて焼いていました。すべて世は何事もなく、うららかに涙ぐましく、そこに私はあの独歩に教えられたワーズワースの詩を想い、私のあくがるもの、求めてやまぬものは都会を離れた遠き田園の中にあるのではないか、ああ私も塵を払ってその田園に隠れよう。いまは、もう心を虚しうして世の慣わしに従い、人の妻となろう、とようようそこに決心されたのでありました。」と愛蔵の下に興入の決意を成すに至るまでの心の変遷を回想している。

明治30(1897)年3月、明治女学校を卒業し、同月19日、星良は東京牛込払方町の日本キリスト教会で相馬愛蔵と結婚した。司式者は当初、押川方義であったが、当日都合悪く、合衆国改革派教会の宣教師モーア(Jairus P. Moore)が代役を勤めた。媒酌人も又、島貫兵太夫妻に予定されていたが、婦人の産後の日未だ浅く、そのため、婦人の代りに巖本善治が介添を成した。⁶⁰⁾黒光は彼女の周囲に集い、そして彼女を見守りつづけた人々の祝福を受けて信州に嫁いでいった。

「東穂高の里」に立つまでの経路は上野から汽車で上田に行き、上田から人力車と馬で保福寺峠を越えて浅間温泉に一夜を明かし、翌朝、仙台の「里代り」となって世話してくれる木下尚江の母くみの待つ松本に入り、そして糸魚川街道を人力車で走って東穂高村に着く。その日は3月25日であった。

東京生活の破綻を「東穂高」で慰懐されることを願った黒光の来穂は愛蔵黒

光夫妻の周辺にいささか当惑と華やぎをもたらしていった。それは彼女の質素でこの地に不釣り合いな嫁入り道具に示されている。蒲団の包みと行李二つ。⁶¹⁾そしてオルガンと長尾空太郎の描いた油絵一枚。⁶²⁾花嫁の資格が「箆笥長持、そして衣裳の数」でほぼ決まる折に、かかる道具を持って輿入るのは、「村の風習を無視」する闖入者と見てとられたことと思う。⁶³⁾しかも、この相馬家は「東穂高村」に於て屈指の旧家の一つ、村に範を成すべき家の一つであった。そこに、「仙台の士族の娘、明治女学校を卒業」し、⁶⁴⁾「新文化」の香りを心身に涵みこませた黒光が型破りの身仕度で嫁ぎ、そして「村人」として共に生活しようとする。これは周囲に衝撃と違和感をもたらさざるをえなかったであろう。しかも、周囲はこの「田園賛美者」を素直に「田園生活」を成す「村人」として受け入れ難かったことでもであろう。

「しんとして音もない午後、人なき応接間の扉を押し、オルガンの前に腰かけ、絶えて久しき鍵^キに触れて低声に讚美歌をうたった。応接間じゅうの大ランプや油絵や、頑丈で稚拙なストーブまでがちゅっと喜んで声を合わせてくれるようであったが、窓の鉄格子にぶら下がって子供の頭が一つのぞいたと思うと、たちまちその頭がふえて、何か言ってわらった。私は玄関をあけて、子供たちに言った。『一緒にうたうからお入り。』」

私は幼少の時仙台で、教会から洩れてくる讚美歌にひきつけられたことを思い出し、子供たちに知己を得た気持であったのだが、子供たちはあかんべえをして蜘蛛の子を散らすように逃げてしまった。と、もうここではオルガンの音も讚美歌もどんなに突飛^{とっぴ}であるかが反省されて、手を触れる気がしなくなり、オルガンは次第にうすい埃をかぶるようになった。⁶⁵⁾

子供たちの好奇心といささかの「邪氣」とが縋い交ぜになった「あかんべえ」に怯む黒光は彼女自身も周囲との不調和に悩み、そして周囲に受け入れられない悲哀と寂寥感に苛まれていたのであろう。彼女はワーズワスの詩や由井ヶ浜や山々で目撃した光景より描きあげた「世界」と現実に身を置き、生活する「世界」との懸隔を知り、そして因習を色濃くとどめた地で生活することの困難さを味わったことであろう。彼女の抱いた「田園に隠れ住む」ことへの夢は現実の生活の下で色褪せていった。「魂」の治癒と充足は「東穂高村」の自

然の中に見い出せず、しかも、「自然」は癒すどころか苦汁を強いていったのである。その上、嫁いだ相馬家の中にも、彼女の描く「主婦」としての仕事はなかった。家長、相馬安兵衛（愛蔵の長兄）は家の一切の采配を振り、「朝のおつゆの実」の選択まで行い、そして豆腐や醤油の買物まで男が成していた。⁶⁶⁾

「こうなると、22歳になったばかりの働き盛りの私には何の仕事もないことになる。せっかく農村の生活に安住を求めて来たのに、百姓仕事は出来ず、機を織る事を知らず、台所もさせてもらえず、強いて仕事と名をつけて見るならば炉端で火を焚くこと、お膳の出し入れ、いま一つランプの掃除くらいなものであった。」⁶⁷⁾

一人前に「農民」として働く力のない腑甲斐なさ、そして「主婦」としての才覚の発揮できない焦慮感は「利かぬ気」の彼女を一層鬱結させていったことであろう。彼女は周囲との不調和の下で、この地に「安住」するためには、執拗に「東穂高の里」に根付く生活を求めなければならないことに気づいていったと思う。しかし、彼女のこの希求は容易に適えられるものではなかった。彼女は一叢の樹々の繁りに囲まれた相馬家の墓所で、「今のようではもうどうしてもいられないのです。」「夢にでも、私が奮い立つような、ほんとうに相馬家のものとして生きて出るようなお告げを下さい。」⁶⁸⁾との訴えを成すが、これが「東穂高村」に骨埋めようとする彼女の偽らざる「気持」であったのだろう。これほど、彼女は閉塞下に身を置いていた。

しかし、彼女のこの苦悶は夫愛蔵以外には余り察知されていなかったように思う。明治32年5月30日の萩原守衛（礫山）の「日記」に、「桑摘みなす姉良子の君と対話数刻、女学雑誌の事より、宗教上信仰の堅と否の事に付き談あり。(アマ才智ある婦女子の会話実に喜しきものなり)」⁶⁹⁾と、19才の守衛が彼女と対話したことを感動をもって語っている。若き感受性鋭い守衛も黒光との対話から、「新しい世界」を夢見、瑞々しい刺激を受けるにとどまり、彼女の暗澹を見つめるまでには到っていない。同年8月15日の「日記」を見ても、「星姉出で、例の快活なる声とたのしげなる顔とにて高尚なる宗教談30分計り、非常の慰を得たり」⁷⁰⁾と、彼女の憂鬱な相貌は記されず、気力漲る姿が記されている。彼女の煩悶が守衛との談笑によって悉く消失するとは考えられず、これ

は守衛と共に彼女の周囲に集った進取の精神に富んだ青年たちが一応に彼女を「新文化」の「担い手」と見、「仰ぎ」、そして彼女を通して「新世界」への飛翔を夢見るだけで、彼女の翳にまで見入ることのできる冷静さを所持していなかったためであらう。⁷¹⁾

明治31(1898)年5月1日、愛蔵、黒光の下に、長女俊子が誕生した。彼女は母に成ることによって、閉塞した生活が育児を通して開かれていくことを期待していたと思う。俊子命名は、「学識才操ともに当代女流の第一人」と言われた畏敬する中島湘煙(俊子)の名に因んだものであった。彼女は「生れた子供が女ときくと同時に、この娘の使命が強く感じられた。娘よ、成長して立派な婦人になってくれ。志操高く、才能に秀で、そして愛情ゆたかに。それからもう一つ、それこそ私の最も切なる願いであった。娘よ、成長して小さな炉辺の幸をぬすむな。大きな世界に眼を開いて正義の愛に燃え、意義ある仕事に一生を捧げよ。」との生れ出た俊子に対する切望を語り、そして「炉辺の幸」を求めて「田園」に埋没することに悩苦する「母」を越えて「正義の愛に燃え、意義ある仕事」に邁進することを希求している。しかし、彼女の俊子の成長に対する熱き思いと期待は義父安兵衛夫妻の「育児干渉」によって破綻を招こうとしていた。愛蔵の長兄、相馬家の家長、安兵衛は子供を有していなかったため、末弟愛蔵を家督相続人と定め、入籍していた状況下に、俊子が誕生した。「私は俊子のように手から手へ渡されて大きくなる子を知らなかった。(中略)お祖父さまお祖母さまが可愛いがって下さるのは嬉しいことであったけれど、私の不安は去らなかつた。⁷²⁾」彼女は俊子への育児を希望通りに果せない焦燥に苛まれていた。「抱きぐせがついて下におけば泣き、手から手へ渡って、内部からの開眼を待たずに智恵づけられる。この子はこうして静かに物を観、そして考えることの出来ない娘、影響ばかりで独自性のない女になる」⁷³⁾ののではないかとの恐怖。かかる不安感は違和感を呈していた「田園生活」に根付くことへの腐心から、俊子養育への「環境整備」に配慮することへと彼女を転化させしめていったのであろう。

明治32年3月12日の「礪山日記」を見ると、相馬家に於て「日曜学校」が開校されている。その日、黒光はオルガンを弾き、愛蔵は「日曜学校は道徳を教

え、日曜学校の校長主基督⁷⁵⁾であるとの「講話」を成している。又、3月19日を見ると、愛蔵が「ギリシャ」の哲人ソクラテスが門人某に神の有を説ける話⁷⁶⁾をし、黒光が「キリスト病者を助けし話、同しく讚美歌主ノ日を教」える⁷⁶⁾と記されている。この「日曜学校開校」は「東穂高村」に良風を拡げ、固陋で猥雑—農民が素朴と見えるのはその外形にのみ眼を止めるからで、生活そのものだけが質素、というよりも、むしろみじめであり、ワーズワースの詩にみるような美しいものは影もなく、あまりに原始的な、それはもう野生そのままの浅間しい姿⁷⁷⁾—な精神風土を「幼き者たち」の徳育の向上をもって改良したいとの思いがあったのであろう。しかも、この改良志向への背後には、俊子の養育に鑑みた配慮がひそんでいたことは否めないと思う。彼女は「日曜学校開校」をもって彼女の描く「吾が子」への教育、育児観を周囲にいささかでも示そうとして実践したのであろう。彼女は『穂高高原』の中で、「東穂高村」における俊子養育の苦慮を語っている。「子供の成長のどの断面にもさながら樹木の年輪のように風雪寒暖を刻んで、また環境の微細なものも肌膚にひそみ、その身の一部をなすのであるという想いがしらずしらず浮かび、そうして信じられ、すると我が子をつつむ空気のありようにまで神経がはたらき、まして我が子の眼にうつるもの、耳に入るものには、極端にまで潔癖に、いかなる場合にも選択⁷⁸⁾を欲してやまない。」

これは「穂高時代」を回想したものではあるが、彼女の育児に対する苦悩の日々を充分に表わしている。彼女にとって、亀裂した「魂」の慰めは俊子に誰憚ることなく愛情を注ぎ、彼女の考え通りに育児を成すことであった。しかし、彼女の周囲はその思いを知り、満たすまでには到っていなかった。愛蔵黒光の「日曜学校」が何時まで存続したのかは未だ知りえないが、「風俗改良」を目差したこの「学校」も周囲に受け入れられずに日浅くして閉鎖の憂目を見たのではなかろうか。しかも、それは周囲の不理解だけでなく、夫妻と言うより黒光の周囲に対する失望にも与っていたのではなかろうか。

「東穂高村」における「風俗改良」、「生活浄化」運動はこれ以前にもあった。それは明治24(1891)年12月20日に愛蔵を中心として結成された「東穂高禁酒会」であった。愛蔵は明治23年東京専門学校邦語行政科卒業後、北海道に

渡り、東京で以前より面識一愛蔵は東京専門学校在学中受洗一のあった矢島楯子を通して、北海道の禁酒会運動の中心人物、伊藤一隆、又、藤村信吉・穎子夫妻と親交を結び、翌年帰穂した。彼は帰穂後、「都会に憧れ、新しい知識を求めて」周囲に集まる青年たちに「基督の話をし、禁酒をすすめた。」そして青年たちは彼の話に熱心に聞き、「畑仕事の間にもふところに聖書を入れ」るまでになっていったのである。この愛蔵のもたらした「基督教と禁酒」はこの地の青年たちには「新しい文化」の芳醇さ、「新知識」の産物と見えたのであろう。それ故、彼らは「宗教のことに無関心」で「基督教と来てははなはだしい毛嫌⁸⁰⁾い」を成すこの土地の現状を憂慮し、「基督教と禁酒」をもって、「東穂高村」の生活浄化、風俗改良に乗り出そうとしたのであろう。「東穂高禁酒会申合規約」(明治24年12月20日)を見ると、「第一条本会員は禁酒を主として且品行を慎しみ職業に勉強し節儉を行ひ他人の為に計ることを誓ふべし。第八条本会は決して宗教及び政治に関係せず。」⁸¹⁾と記され、この会が「宗教結社」、「政治結社」を目差すものでなく、「生活浄化」、「風俗改良」運動と会員の倫理的陶冶を成すものであることを示している。けれども、彼らが如何に倫理的陶冶だけを目差す「微温」な運動と考えようとも、「村の寄合い」、「婚礼法事」の席で酒を拒み、又、酒を伴うかかると集會に欠席することの挙動は「村人」との反目、対立を生じさせない訳にはいかない。彼らが頑に自己主張をつづければつづける程、周囲から突出し、又、孤立した青年たちは「世間の凡俗に僕らのことが分るものか」⁸²⁾という批判の言辞を吐き、両者の摩擦、対立は一層深まっていくなるとなる。

かかる摩擦を胚胎させた情況下に、地域有力者は「東穂高村」の繁栄を図ろうとして、この地に芸妓置屋の誘致をすすめる動きが生じた。同禁酒会は「青年同志会」、「東穂高村生徒父兄」と「共闘」を組み、明治27年3月24日より明治30年7月17日に至るまで数度、豊科警察署長、長野県知事に宛て「非芸妓設置請願書」⁸³⁾を提出し、広範囲に亘る芸妓設置反対運動を展開していった。この「東穂高村」を騒然とさせる反目、対立は東穂高組合高等小学校正教員、同禁酒会有力メンバー、井口喜源治を同小学校より追い、明治31年10月、豊科組合高等小学校に転任させる事件を生みだした。生活浄化、風俗改良を目差す禁酒

会の運動は一教師に小学校教師辞職を決意させるまでに波及していった。それは豊科組合高等小学校の教師たちが「彼もし来たらば我らは同盟して学校を去るべし。彼と共に教鞭を執らざるべし」⁸⁴⁾と一致団結して盟約を結んだためであった。井口は禁酒会批判の渦中であって、明治31年11月12日、依願退職し、小学校教師を辞したのである。⁸⁵⁾

同禁酒会の実践行動が一人の教師を野に下らせた。そしてこれが「東穂高村」の青少年を陶冶させるに多大な貢献を成す「私塾研成義塾」(校長、井口喜源治、明治31年11月7日より昭和13年3月29日)⁸⁶⁾を東穂高村矢原に設立させる契機になったとは言え、「東穂高村」は一人の教育者を、一人一人の「魂」に語りかけ、個々の個性を伸長させることに教育の真髄を見出し、その教育に挺身しようとする教育者を野に葬り去ってしまったのである。それ故、井口と井口の支援者(臼井喜代、相馬安兵衛、東穂高禁酒会会員)は「靈魂の陶冶」を成さしめ、個々の「天賦の特性を發展せしめ」る「文明風村塾的」⁸⁷⁾研成義塾をもって、「東穂高村」の精神風土の開墾を試みようとした。そして愛蔵・黒光の「日曜学校」もこの意図の下に開校されたのであろう。しかし、「郷党」としての喜源治、愛蔵と「異邦人」として違和感を抱いて生活する黒光とは、自ら「東穂高村」に対する親和の度合は異なる。彼女は自己の存在を、喜源治の教育への熱誠を受容しえない頑な「東穂高村」に気づいたとき、以前抱きつづけた都会生活への嫌悪と田園生活への憧憬は変化していったのである。「魂の亀裂」の癒しを求めて赴いた田園生活の実相は彼女に一層深い亀裂を生じさせていった。

「都の消息は、前にもまして私を焦燥に追いつめました。あれ程いとわしく見切りをつけてきたはずの都会の生活が、かって知らぬなつかしきをもって思い出され、いたずらに虚飾を張るとみえたものまでも、あまりに原始的なものにくらべて、やはり向上の途にあるものとして肯かれ、都会人の歯切れのよい言語、表情、日常生活の洗練されていることも、ようやくここにきてわかり、日に日にいや増しに都恋しくなりました。」⁸⁸⁾

田園生活への不満はそれへの嫌悪に変わり、そして捨て去ったはずの都市生活への追慕へと彼女を狩り立たせていった。そしてこの嫌悪する田園生活にあっ

て、愛児俊子を養育する彼女の不安は更に都市への思いを募らせていったのである。

「やがて私は東京の精神的な方面のみを想いかべるようになった。そうして新知識と称されるあの家この家庭の様子を考え、愛児の教育、理想的な育児の実際、意外にもそれが自分から遠いものになっている現在に深い不安を感じるのであった。⁸⁹⁾」

明治32年9月、不安と焦燥の中にある彼女に、愛蔵、俊子と連れ立って東京、仙台に赴く機会が訪れた。それは仙台への「里帰り」と「持病」の治療を東京で行うためであった。彼女はこの家族水入らずの旅を回想して、「仙台へ里帰りとして許された旅は、じつは東京へ里帰りしたことになり、地方農村の倦怠に萎えた心は新たな息吹を吹き入れられ、またしばらくではあっても俊子を夫婦の間において、真に行く末を思う母の心で躑躅をし、そうして自分は健康を得たのであった。入院と施術は無論のことながら、東京の空気はたしかに私に薬であった。⁹⁰⁾」と語り、彼女の焦燥、不安が「東京の空気」の下で癒えていったことを示している。愛蔵が同年12月29日に一足先に「穂高」に帰るまで、親子三人は東京に住む友人たち一荻原守衛も同年10月上京し、不同舎に学ぶ一と親交を結び、そして黒光は心癒され、潑刺とした気持で、翌年初冬、俊子を連れて帰郷した。

しかし、出郷で得た「浄福」は彼女を取り巻く重畳する峻厳な山岳群の威圧と田園生活の猥雑さの前に消失していった。彼女は帰郷によって再び「魂の呻き」を覚えたのである。

「魂のどん底から起る呻き、呻きつつもなお忍びに忍んで幾月かを過ごしましたが、その頃の私は煙をはき得ぬ噴火山ともいうべき形で、ただ一カ所はけくちを求めたものが、筆のすざびというも愧ずかしい拙文で、いいえ、文章などといわれるものではなく、胸中を去来する黒い雲のような、渦のようなものを一塊にしてほうりだした。⁹²⁾」

彼女は「魂の痛み」を引き起す田園生活の罵倒、すなわち田園呪詛を文章化することでカタルシスを行い、そしてそれらを数篇『女学雑誌』や『無絃之響』などに掲載をした。⁹³⁾ けれども、明治33(1900)年11月26日、長男安雄を出産

し、又、養育に一層心痛める日々が生じ、更に、明治34年3月、仙台時代からの友人布施淡の訃報を聞き、同年4月叔父佐々城本支、5月叔母佐々城豊寿、7月姉蓮子の死を次々と体験し、生きることの辛苦を深く味わった。「東穂高村」に生きることが彼女を心労させ、又、喘息にかからせ、しかも、親しい人々の訃報は彼女を憔悴させて床につかせてしまった。そしてこれは、憔悴し、⁹⁴⁾ 生気を失った妻の側にある夫愛蔵に離郷を真剣に考えさせていったのである。愛蔵は妻黒光を伴って離郷に至る背景を『一商人として』の中で次のように語っている。

「良は最初田園の生活をよろこび、私の蚕種製造の⁹⁵⁾ 仕事にもよき助手として働くことを惜しなかつたが、都会において受けた教養と、全身全霊を打ち込まねば止まぬ性格と、それには周囲があまりに相違した。その中で長女俊子が生れ、次いで長男安雄が生れた。するとまたその子供の教育が心配されて来る。良はどうとう病気になるので、私は両親（相馬安兵衛夫妻一葛井注）に願って病氣療養のため上京の途についた。⁹⁶⁾」

愛蔵は「精神的苦悩から心身疲労して」、「行末危ぶまれる状態」に陥っていた妻を案じ、彼女の病氣療養と生活一新を考えて、明治34年9月出郷を決意して、上京した。⁹⁷⁾ しかし、この離郷は親子四人のそれだけでなく、長女俊子を安兵衛夫妻の膝下に残す出で立ちであった。彼らの「穂高」脱出の決断は黒光の病氣療養を目的としていたとはいえ、それ以外に子供たちの養育を憂慮した結果でもあったはずだ。しかし、彼らは長女俊子を「東穂高村」に残すことに同意して出郷したのである。

「万水の東の岸に越えて立てば、我が家の土蔵の白壁は求むれど見えず、鎮守の森だけが朝靄の中にこんもりとおぼろに、それが村の見おさめであった。落人にも似た一行は犀川を越えてようよう明科に着く。桑畑や田の畦に人影見えはじめ、里はいま朝であった。朝に先立ち歩いて来た。そうしてこの脚の軽さはどうしたことであろう。随いて来てくれる若い人たちの額にさえ汗がにじんで、しきりにそれを拭う道なのに、昨日までの病人が恥しいほどの元気であった。（中略）夫は右手に見える岩山の切り立った押野という北安曇の部落の白崖を指した。その白崖は相馬の家から真北に当り、明け暮れ私はこれに対し

て、無慈悲な威嚇に打ちひしがれる心地をしていた。夫は格別意味あってそれを指すのでなく、あの岩山のつづきに伝説の登波離橋があることを私に教えるのであったが、私は今日の白崖がもう自分をにらまないのを、気も楽に素直な気持で感じていた。⁹⁸⁾

これは「魂」の癒しを求めて嫁いだ「東穂高村」の生活が現実には彼女を如何に蝕み、苦悩させ、そして「農村の女」として生きることの困難さを痛感させしめたかを物語る文章である。彼女は一步一步「生活の場」を後にすることで離郷の喜びを心身一杯に味わい、そして生気の甦りを全身で深く感じている。しかも、これまで彼女を囲繞しつづけた光景は離郷する彼女を威圧し、拘束することなく、彼女を静に見送ってくれる。田園生活は彼女を育み癒すことができなかった。彼女は「魂」の癒しと自己の救いを求めて嫁いだ田園を去り、再度都会に戻っていった。

彼女はこれまで自己を蝕み、悩ませる「闇黒」は彼女の「外側」にあり、そしてそれに蹂躪されつづけてきたと考えていたと思う。しかし、この離郷は彼女の中に厳然たる「悪」のひそむことを徐々に認識させることになっていったのである。彼女は辛苦の状況から自己のみを解放するために、愛児俊子を犠牲にする「子捨て」を断行し、相馬家を捨て、愛蔵を郷里から引き裂いてしまったのである。「闇黒」に蝕まれずに、「希望の太陽のかがやき」を遙か彼方に見て歩みつづけた黒光の中に消滅しえない「罪・悪」の「闇黒」が巣をくっていたのである。そしてこれが上京後の彼女を蝕みつづけていったのである。

3 「闇黒」の下に佇みて

心機一転して、東京での新生活を成すにあたり、愛蔵・黒光は居を本郷に構えて生活設計を練った。離郷は相馬家の援助を求めず、独立独歩で新生活を切り開くことをも目差すものである以上、彼らは生活の基盤となる「糧」を東京で取得しなければならなかった。そして「生れつき勤め嫌いで、自由の境涯を求め⁹⁹⁾る」愛蔵と「文筆で立つ自信¹⁰⁰⁾」を持たない黒光とが考えついたのは、夫婦で商売を営むことであった。しかし、商売の経験、又、商売に対する知識をも有していない彼らが軽々しく商売に手を出し、失敗する危険性は大きいであっ

た。愛蔵・黒光は商売を営むにあたって、「昔からある商売では、玄人の中へ素人が入るのだから、とうてい肩をならべて行かれそうもない。むしろ冒険のように見えても、西洋にあって日本にまだない商売か、あるいは近年ようやく行われては来たが、まだ新しくて誰が行ってもまず同じこと、素人玄人の開きの少ないという性質のものを選ぶのが、まだしもよさそう¹⁰¹⁾」であると判断した。そして大学を付近に控えた本郷にあって、「素人玄人の開きの少ない」商売は「コーヒー店」か「パン屋」を開業することにあると考えたのであるが、一足先に「ミルク・ホール」が近くに開業されたため、彼らは「パン屋」開業に焦点を絞った。しかし、彼らは即座にその開業に踏み切るのではなく、「パンが一時のいわゆるハイカラ好みに終るものか、それとも将来一般の家庭に歓迎され、食事に適するようになるものか」を調査するため、三ヶ月間、三食のうち二食までを「パン食」にした結果、「パンは将来大いに用いられる」と判断したのである¹⁰²⁾。そして明治34年12月、万朝報に「パン店譲り受け度し」の三行広告を出し、それによって、東京帝国大学正門の筋向いにある「中村屋」を入手した。「商品、竈、製造道具、配達小車、職人、小僧、女中といっさい居抜きのまま金七百円¹⁰³⁾」東穂高の相馬家の援助を受けずに歩もうと決意していた彼らは、同郷の望月幸一より借財してその店を購入し、同年12月30日にそこに移り住み開業した。そして彼らは故郷の援助を受けず、東京でのみ堅実に生活を行おうとする以上、商売の失敗は絶対に許されなかったため、「パン屋」開業の当初に、「五ヶ条の盟」を定めたのである。それは「営業が相当目鼻のつくまで衣服は新調せぬこと。食事は主人も店員女中たちも同じものを摂ること。将来どのようなことがあっても、米相場や株には手を出さぬこと。原料の仕入れは現金取引のこと。最初の三年間は親子三人の生活費を月50円と定めて、これを別途収入（愛蔵は離郷後も夏期3ヶ月間、郷里に戻り、蚕種製造の仕事に従事していた¹⁰⁴⁾）に仰ぐこと¹⁰⁵⁾」であった。そしてこれは繁昌していた「中村屋」が何故に売りに出されたのかという彼らの調査・検討の結果に依ったものである。というのは、先代「中村屋」の主人夫婦は享楽的生活を好み、主人と雇人の区別（食事、衣類など）を明確にし、しかも米相場に手を出し、失敗を重ね、それ故、原料を現金で買えず、掛け買いで一割程高く買っていたこと

が判明したからである。愛蔵黒光夫婦はこの轍を踏まないためにも「五ヶ条の盟」を掲げ守り、そして雇人たちを家族同様に取り扱い、彼ら個々の能力を生かし、彼らと一致協力し合って、商売、商品の研究、調査、開発、改良に努めようとしたのである。彼らの地道で、合理的な経営方法は三年計画で実現させる予定の「独立自営」を1年で達成させ、そして年々商売を大きく拡大させていった。愛蔵は昭和11年12月の「中村屋歳末例会」に於て、「成功の三要素」として、「一業に専心すること」、「同輩より一步を先んずること」、「報恩感謝の念篤きこと」を称えている。これは彼ら夫妻が現実に商売に携わる中で考究した経営哲学の「骨子」であろう。彼らは人間が一事にひたむきに携わり、その下で創意工夫に励み、執拗な思索、実践を成すことより、それぞれ「独自の境地」に達すると信じたのである。しかも、「一業に専心」することは自己の不断努力とともに、自己を生かし、支える「周囲」を発見し、感謝の念をもって生きることになるとも考えた。¹⁰⁶⁾それ故、彼らは雇人が商売に精進するとともに、人格の形成、研磨に励むことを求め、事あるごとに、彼らの見聞、知識拡大のために、一級の芸術品の鑑賞、一流料理店での会食、種々の地域の人情、光景と触れ合える旅行の機会を与えていった。¹⁰⁷⁾愛蔵黒光は「中村屋」を経営するにあたり、独創的な経営方法—「中村屋」を単に商売を覚える場にとどめるのではなく、人間を錬成する「道場」と見なした¹⁰⁸⁾一を展開していったのである。かかる彼らの斬新な商人道の実践は明治40年12月に新宿に支店を出させ、明治42年春には本郷から新宿に本店を移すまでになっていった。

この「中村屋」経営への情熱とその発展、拡大は愛蔵の黒光に対する理解と黒光の故郷を捨てた自責の念と故郷に戻らぬとの決意に与っていたことは容易に窺い知れる。しかし、彼ら二人の共働が睦つまじく、共に手を携え合い、支え合う歩みであったかと言えば甚だ疑問であり、黒光語るように、「山あり、谷あり、急坂あり、泥沼あり、ある時は怒濤狂乱、身も魂も覆されてしまう¹⁰⁹⁾か」と感じられる程の歩行であったと思う。

明治41(1908)年3月11日、礫山萩原守衛は7年間に亘る米、仏での苦難な研鑽を終え、日本美術界に新風を巻き起す力を養って神戸港に入港した。明治34年3月13日に横浜港を出帆した礫山は帰朝後、礫山の理解者、次兄萩原本十

の待つ東京に3月13日赴き、本十の歓迎を受け、同月15日に故郷に向った。明科駅には、井口喜源治、三兄望月穂一が出迎えていた。故郷に待つ祖母、父、母、兄たちとの再会は異国で苦汁をなめた礫山の心を満たしていった。西科惇著、『礫山萩原守衛』は礫山が故郷、「東穂高村」で愛蔵と再会したことを記している。しかも、礫山は郷里での愛蔵との交流の中で、「相馬は他に土地の女性と交渉」をもっているとの疑惑を抱くようになっていったとも語っている。¹¹⁰⁾そしてこれに関して、島本久恵も又、同様の内容を書き記している。¹¹¹⁾しかし、井口喜源治の『備忘録』、明治41年度の記載記事には、6月29日の愛蔵の来穂を告げるだけで、¹¹²⁾3月の愛蔵の「穂高」訪問を知らせる記事は見い出せないが、礫山の研究者、仁科惇の実証的研究、更には、生前の愛蔵・黒光と親交を結んでいた島本久恵の証言は信頼のおけるものと思う。黒光は愛蔵と助け合っ
て「中村屋」経営に携わったのであるが、その共働の下に、相互の齟齬が隠されていたのであろう。黒光の相馬家、「東穂高村」に対する思いと、愛蔵のそれらに対する愛着とは自ら相違してはたはずである。愛蔵が終生、黒光の良き理解者で、伴侶でありつづけたからといえ、それをもって、即座に、黒光と同じ度合で故郷を拒絶したと見なすのは早計であろう。二人は深奥で相互の懸隔を感じ、寂寥を味わっていたと思う。しかも、黒光は長女俊子を故郷に残し、そして長男安雄を頻りに「穂高」の相馬家に戻らせ、¹¹³⁾更に、愛蔵も夏期3ヶ月間蚕種製造のため「東穂高村」に赴くという現実の下で、深い寂寥、悲哀を感じていた。しかし、彼女は仕事に忙殺されることで、かかる憂感を忘れ、又、故郷を捨てた罪責故に、この現実能耐えようとしていたのであろう。けれども、夫愛蔵のこの裏切り行為は容認することができなかったと思う。4月上旬、守衛は東京で美術活動を本格的に成すため上京した際、敬愛する黒光に彼の愛蔵に対する「不信」を語り、そして黒光はその真相究明のため来穂している。¹¹⁴⁾彼女は故郷を捨てた自責を埋めるため「中村屋」の発展に全勢力を注ぎ、そしてその発展をもって自己の罪の赦しを願っていたのであろうが、愛蔵の裏切り行為、守衛の彼女に対する思慕、又、彼の自己の内部を凝視し、それを剔抉して表現する製作態度に¹¹⁵⁾触発されて、彼女も又、深奥にひそむ寂寥より生ずる「魂の疼き」、悲哀より起る「魂の慟哭」を見据えていった。彼女は「東穂高村」

を脱走した「後めたさ」故に、自己の内部にひそむ「罪・悪」の絡み付いた「闇黒」を敢て凝視することを避けてきたのであろうが、かかる人物や出来事との交渉の下で、計らずも自己への凝視を強いられていった。そしてそこに、寂寥と悲哀に凍て付いた「魂」のあることを発見したと思う。しかも、この「魂の破れ」は幼少時以来、「魂の法悦」を求め、そして「大いなるもの」に抱かれることを願いつづけた彼女にとって、放置できない事柄であったであろう。彼女は守衛の回りに集う中村彝、中原悌二郎、戸張孤雁、柳敬助たち芸術家との談論、芸術品の鑑賞の中で、この亀裂を繕おうとしていたようだ。

しかし、明治43年3月28日、4歳になった二男襄二を亡す出来事に遭遇している。黒光にとって襄二は自分の手で育み、母親の愛を誰憚ることなく注ぎえる子供であった故に、彼女の悲痛は筆舌に尽し難い程のものであったと考える。彼女は愛児の葬られた染井の墓地に「来る日も来る日も見えない何物かにひかれて、夢遊病者のようにふらふら¹¹⁶⁾」と向ったと語っている。愛蔵との齟齬の痛苦を癒してくれる子供の死は一層彼女に深い悲哀を与えていった。しかも、同年4月22日には、彼女の信頼する友、礒山も召天したのである。彼女の最も良き理解者の一人の死は彼女を「狂死させる」程の打撃であり、又、「郷里信州へ行く礒山の柩に取りすがって狂態を演じ」させる位の慟哭であった¹¹⁷⁾。この二人の死は彼女の「魂」を生氣のない空洞にしてしまったのである。孤雁は、礒山の遺品である「日記」を一行も読まず、一枚一枚丹念に破って燃やす彼女を「ヘダカブラ」、「冷酷、非情な女」と痛罵しているが¹¹⁸⁾、彼女は一枚一枚、礒山の「日記」を焼くことで、自己の「魂」を殺していったのであろう。

「魂」の抜殻になってしまった黒光は「全く生活の力¹¹⁹⁾」を失い、「此の世には何の希望¹²⁰⁾」も持つことができなくなり、翌年春、病床に倒れ、一時重態にまで陥っていったのである。井口に宛てた明治44年4月25日付の黒光の書簡を見ると、「疲れて疲れて丁度骨を抜き去られた様に力がなく、グタリとしてねて計り居るのです¹²¹⁾」と書かれ、傷悴しきった黒光の姿が記されている。しかし、翌年8月9日付の井口宛の手紙には、「御心配下さいました病氣も未だ全快とは参りませぬが、昨年の今頃に比しては雲泥の相違で御座います。世界が全く一変した如くに見えます。(中略)私は肉体の病気よりは、霊の病根を知るの必

要を認めて以来初めて、生活の真意義が幾分了解が出来たかの如く思います。私は実際此の春病む迄は多年の煩悶や宿題に行詰まって、遂に生存の無意味を覚り困り切ったのでした。私の吸収したそれ迄のキリスト教は少しも解決を与えませんでした。霊は救へずして却而益々暗黒に墜落する計りでした。けれども、神は恵み深くましまして、^(ママ) 鞭撻に鞭撻を加へ玉ふて、終に幾分の光明を認めし玉ひました。人の罪を許すということは取りもなほさず己が罪を許すということ、自己の責任を感じずることに□□却而重荷を下した様な気楽と平和を得た様¹²²⁾と書き記し、心身の回復の兆しの訪れを示している。彼女は久しい病臥生活で、自己の内面を凝視し、自己の周囲を眺めることから、「自己の罪・悪」、「自己の責任」、「空洞となった魂」を思い見る「余裕」を持つことができるようになったのであろう。そしてこの前後に、黒光は木下尚江を通して岡田虎二郎の「静坐法」に接していった。この「静坐法」は「霊肉合致」、「心身一如¹²³⁾」を目差すものであり、又、「生命の真の姿」を知るために、「生きた目を開いて、内から直ちに(ありのままの自己を)見る¹²⁴⁾」ことを要請するものであった。彼女は岡田の指導の下で、徐々に健康を回復していったのである。彼女はそれまで「霊肉分離」、すなわち「魂」を「大いなるもの」に向けて飛翔させる一方、「肉」を邪悪、猥雑な「闇黒」の場にとどめおくという「不一致」の下で悩苦しんでいたのであるが、岡田との接触の中で、「魂」を邪悪な「肉」の場の下ろし、そこで充足して生きることを教えられたのである。彼女は「闇黒の中にもがいていた魂が、あたかも濃霧のうすれゆくように次第々々に明るみを見だし、周囲の物の姿が、あるがままの安らかさに見え¹²⁵⁾」てきたと証言している。彼女は「あるがまま」に生きる喜びを味わい、又、現実に「肉」の置かれている猥雑醜悪な場に「霊肉」共に生きることが赦されていることを知ったのである。「闇黒」を嫌悪拒絶し、そこよりの「魂」の飛翔に煩悶しつづけたことから、醜悪な「場」で大らかに「心身一如」して生きえることに気がついていったのである。これは「闇黒」を拒絶しつづけた彼女にとって大いなる「生」の転換であった。そして彼女は「あるがままの自己」凝視に踏みだしたのである。

大正2(1913)年、黒光は正教神学校(日本ハリストス正教会)の卒業生、

内藤三雄の指導の下に、「中村屋」で早稲田大学教員の桂井當之助、片上伸、吉江喬松たちと共にロシア語を学び、ロシア文学の研究を開始した。彼女はロシア文学書（「アンナ・カレニナ」、「どん底」、「罪と罰」、「カラマゾフの兄弟」）を耽読する中で、「ロシア特有の捨針で善良な人間や、各種の人物の深刻な心理描写¹²⁶⁾」に深い関心と感動を覚えている。これは、彼女が自己の深奥を凝視し、探りあてた自己の内部に渦巻く「欲望や憧憬や不安や恐怖」の「昏い想い」がロシア文学作品（特にドストエフスキイの作品）の中に見事に形象化されていることを発見したからであろう。彼女はロシア文学を生みだす土壌の中に彼女を蝕みつづける「闇黒」、人間の「罪・悪」と抗いつづける「精神」のあることを「直感」し、しかも、耽読する中で、その「直感」が至当であったことを確認するとともに、作中人物たちが悩苦しなながらも逞しく生きつづける姿に共感したことであろう。更に、彼女の自己直視はロシア文学への傾倒の他に、「精神的漂泊者」への共鳴、支援をも生みだしていった。彼女の「遙か彼方に希望の太陽のかがやき」を求めた「心の巡歴」の「残滓」、「痕跡」は亡命者、インド独立運動の指導者、ラス・ビハリ・ボース、朝鮮独立運動の志士、林圭、ロシアの盲目詩人、エロシェンコ、白系ロシア人、ニンツアたちの「漂泊の痛苦」を理解させ、そして彼らを擁護させていった。彼女は岡田虎二郎との触れ合いの中から、「闇黒」逃亡志向を拒絶し、自己の「罪・悪」の絡み付いた「闇黒」を直視し、そしてその重みに耐え、その下で戦い生きつづけることによって、真の「霊肉一致」を確立しえると「確信」したのであろう。彼女は岡田が大正9（1920）年10月17日亡くなる日まで、毎朝、「日暮里本行寺の静坐道場」に赴き、彼の指導を仰いでいた。そしてその間に生じた大正4年12月25日の四女、てつ（1歳）の死、又、同月30日、畏友桂井の死の悲哀を受けとめ、大正7年7月9日以降の亡命者ボースと結婚した俊子の苦勞を悉に見つめ、更に、大正5年の全身に渡る水腫、又、大正8年の流産が原因して生じた出血の大患にも立ち向おうとした。かかる彼女の執拗な姿勢、すなわち自己の悲哀、苦悩、醜悪さの下に佇み、「霊肉一致」を堅固にしようとする気構は、大正8年9月下旬に、「身も心も洗い清められたところよさ¹²⁸⁾」を味わわせ、「精神だけが自分のもので、肉体は生物の約束に縛られたものとして常に絶望

していた（中略）私が、はじめて靈肉大人になった¹²⁹⁾という「靈肉一致」の歓喜を体験させたのである。

しかし、「偉大な先覚者」、岡田の死は彼女を慟哭させ、「ただ茫然と野原にとり残された思いで、どちらを向くべきか、どう歩いてよいのか、全く抛りどころのない¹³⁰⁾」寂寥と不安を覚えさせた。彼女にとって、岡田は彼女に「生」の転換を知らしめた大いなる人生の師であった。長男安雄は、彼女の周囲に「岡田先生だけの人がその後もない¹³¹⁾なかった」と証言している。しかし、彼を失った寂寥と不安の日々を覚えても、彼の残した「靈肉一致」の思想は彼女の中で消え去りはしなかった。彼女は醜悪な自己を引っ提げ、悩苦と悲哀を醸し出す「闇黒」を凝視しながら、そこで「靈肉一致」を不動にさせて、懸命に生き、働こうとしたのである。それは、大正9年、エロシェンコ検束の際の淀橋署の無法さに対する告訴、大正11年の朝鮮、満州旅行の途次で味わったチョコレート、松の実を利用した新菓子製造（ロシアチョコレート、松の実カステラ）への情熱、又、大正12年9月の関東大震災の折の原価販売（地震パン、地震饅頭、奉仕パン）の励行、朝鮮人保護に示されているであろう。

大正14（1925）年3月4日、離郷以来、黒光の心を疼かせつづけた長女、ボース俊子が永きに亘る潜行生活の心労が昂じて没した。そしてこの葬儀は仏式で行われた。島本久恵は近著『俚譜薔薇来歌』の中で、「俊はインドの人に嫁した、仏教国のインドの嫁¹³²⁾」として仏式で葬儀を行うことを母として黒光は決意したと語っている。不便な俊子に対する母としての最後の愛情の表現であったのかもしれない。そしてそれと共に、岡田の「靈肉一致」の思想が黒光には禁欲的、倫理的としか思えなかったキリスト教よりも「他力道」の浄土宗に親近性を覚えさせたのであろう。彼女は俊子の葬儀の際の導師、渡辺海旭、又、海旭没後の大島徹水、更には仏教学者矢吹慶輝の指導の下で、浄土宗と触れ合い、「他力」による「救済」を知ったのであろう。彼女は幼少時以来、自己を取り巻き、蝕む「闇黒」との格闘、それからの飛翔、それを克服しえないことから生ずる挫折、絶望感に苛まれつづけた。しかも、彼女は離郷以来の煩悶と、又、岡田との交流の下で、その「闇黒」が自己の深奥に厳然と存在する「罪」、「悪」に増殖されつづけていることを知らされ、自己に絶望、嫌悪しながら

も、「穢れた肉」の下に「魂」を入れ、「靈肉一致」して「穢土」で生きることが赦されていることを悟ったのである。そしてこれが法然の語る「他力」の「救済」、すなわち、浄土教の示す内省による「自己絶望」より起る「弥陀の本願」¹³³⁾であることを理解し、又、明治期の浄土教の指導者、清沢満之の説く「罪惡のままの救済」¹³⁴⁾、「泥足のままの救済」¹³⁴⁾と相即することを悟ったのであろう。彼女は岡田を通して浄土宗に到り、「静坐法」の補足と確信を渡辺、大島、矢吹の教えから見いだしたのである。それは現実の生を織り成す下で「大いなるもの」に抱かれ、それによって赦され、生かされている「信仰」の確信であった。黒光は「古寺巡礼」の途次、奈良の新薬師寺の薬師如来を見学した際、「新薬師寺の御本尊は私には単なる仏の御像ではなく、その御皮下にはあたたかな血が流れていて、われわれ人間と同じところまで下って頂いて拜まれるような親しみと魅力を感じます」¹³⁵⁾との印象を語っているが、これは「醜惡な闇黒」—現実の生活、人間の存在—の只中に「大いなるもの」が生き、働き、そして痛み病める存在全てを癒しつつけているとの「魂の法悦」の言葉である。彼女は昭和4年11月2日、四男文雄を南米アマゾンの奥地アリアンサで亡す悲しみを体験し、又、五男虎雄の非合法運動に苦悩するのであるが、懺悔と「大いなるもの」に赦されることを祈りつつ、昭和30年3月2日、享年79歳で没した。

結 び

「魂の遍歴」は終わった。没落士族の娘、星良が彼女を囲繞する「闇黒」を蹴って、「魂の法悦」の成せる「遙か彼方の希望の太陽のかがやき」を求めて、仙台を去り、横浜、東京を去り、「穂高」を去った。しかし、「魂の法悦」は自己の中にひそむ「罪・悪」の「解決」を見ずには成就しないことを悟った。抗い、殲滅しなければならない「闇黒」は自己の「罪・悪」であった。人間存在の「根本悪」に彼女は気づかされたのである。充実した生を、自由なる生を叫びつつけた一人の近代知識人の女性が沢山の優れた人物、種々の書物、商売の実践を通して、かくまで自己に沈潜、内省して「闇黒」を凝視し、格闘し、克服に努めた「実例」は稀有である。彼女の「魂の遍歴」と「罪・悪」への直視

は私たちに「近代の人間」の苦汁を示してくれる。そして真に「生きる」ということが、自己の「闇黒」を直視し、それと対峙することであることをも教えてくれる。私たちは今後、第二の「黒光」、第三の「黒光」を発掘探求することで、私たちの「闇黒」を剔抉し、それとの対峙、その克服を更に教えられることと思う。黒光の苦悶は又、私たちのそれであるから。

注

- 1) 相馬愛蔵・黒光著作集刊行委員会編『相馬愛蔵・黒光著作集5 広瀬川の畔』（以下『広瀬川の畔』）郷土出版社，1981年，86ページ。
- 2) 相馬黒光著『黙移—明治・大正文学史回想』（以下『黙移』）法政大学出版局，1977年，343ページ。
- 3) 島本久恵著『明治の女性たち』みすず書房，1966年，291ページ。
- 4) 相馬黒光著『黙移』，243ページ。
- 5) 拙稿「光を求めて—羽仁もと子の「新人」の思想」（『キリストの出会い』第三号所収）桜美学園，1983年，61ページ。
- 6) 『広瀬川の畔』，75ページ。
- 7) 同書，74ページ。
- 8) 同書，53ページ。
- 9) 同書，77ページ。
- 10) 『黙移』179ページ。
- 11) 同書，4ページ。
- 12) 『広瀬川の畔』，78ページ。
- 13) 同書，19～24ページ。
- 14) 『黙移』，347ページ。
- 15) 同書，351ページ。
- 16) 同ページ。
- 17) 『広瀬川の畔』，87ページ。
- 18) 同書，109ページ。
- 19) 同ページ。
- 20) 同書，99ページ。
- 21) 同書，127ページ。
- 22) 同書，125ページ。『黙移』，7ページ。
- 23) 宮城学院80年小誌編集委員会編『宮城学院80年小誌』学校法人宮城学院，1966年，15ページ。
- 24) 『黙移』，11ページ。
- 25) 『広瀬川の畔』，151ページ。

- 26) 『黙移』, 15ページ。
- 27) 同書, 22ページ。
- 28) フェリス女学院100年史編集委員会編『フェリス女学院100年史』フェリス女学院, 1970年, 71ページ。
- 29) 佐波亘編『植村正久と其の時代』第3巻教文館, 1976年(復刻版), 48ページ。
- 30) 井深梶之助とその時代刊行委員会編『井深梶之助とその時代』第1巻学校法人明治学院, 1969年, 258ページ。
- 31) 『黙移』, 23ページ。
- 32) 同ページ。
- 33) 同書, 24ページ。
- 34) 『広瀬川の畔』, 147ページ。
- 35) 同書, 150ページ。
- 36) 同書, 21～22ページ。
兼の長男, 病死, 次男, 「発狂」, 三男, 失明の後, 斬殺, 四男, 自殺, 兼, 子宮癌で病死, そして明治25年, 長男の嫁, 斬殺されるという悲運続発。
- 宇津恭子著『才藻より, より深き魂に一相馬黒光・若き日の遍歴一』YMCA 出版, 1983年, 140ページ。
- 37) 『広瀬川の畔』, 23～24ページ。
- 38) 『黙移』, 27～28ページ。
- 39) 『広瀬川の畔』, 194ページ。
- 40) 同書, 186ページ。
- 41) 同書, 185ページ。
明治26年夏と記したのは, 岩村清四郎著『基督に虜はれし清松』キリスト新聞社, 1982年(復刻版)より推察する。
- 42) 岩村清四郎著『基督に虜はれし清松』, 63ページ。
- 43) 『黙移』, 31ページ。
- 44) 『広瀬川の畔』, 199ページ。
- 45) 『黙移』, 31ページ。
- 46) 同書, 167ページ。
- 47) 『広瀬川の畔』, 196ページ。
- 48) 『黙移』, 168～169ページ。
- 49) 牛丸康夫著『日本正教史』宗教法人日本ハリストス正教会教団府主教庁, 1978年, 55ページ。
- 50) 良の「利かぬ気」と習作的恋愛小説が起因して, 彼女が失恋に悲観して自殺したという中傷記事を新聞に書かれ, 社会の嘲笑の的になるという出来事が明治29年2月起きた。『黙移』, 173～176ページ。
- 51) 同書, 167ページ。

- 52) 同書, 178~179ページ。
- 53) 同書, 176ページ。
- 54) 『広瀬川の畔』, 209ページ。
- 55) 『黙移』, 172ページ。
- 56) 『広瀬川の畔』, 209ページ。
- 57) 同書, 206~207ページ。
- 58) 『黙移』, 179ページ。
- 59) 同ページ。
- 60) 『広瀬川の畔』, 214~215ページ。
- 61) 相馬愛蔵・黒光著作集刊行委員会編『相馬愛蔵・黒光著作集 | 穂高高原』(以下『穂高高原』) 郷土出版社, 1980年, 28~29ページ。
- 62) 同書, 44ページ。
- 63) 同書, 28~29ページ。
- 64) 同書, 35ページ。
- 65) 同書, 59~60ページ。
- 67) 同書, 48ページ。
- 68) 同書, 65ページ。
- 69) 荻原守衛著・杉井六郎編『嶽山日記つくまのなべ』同朋舎出版, 1980年, 141ページ。
- 70) 同書, 216ページ。
- 71) 『穂高高原』, 44ページ。66ページ。
- 72) 同書, 105ページ。
- 73) 同書, 107~108ページ。
- 74) 同書, 170ページ。
- 75) 荻原守衛著・杉井六郎編『嶽山日記つくまのなべ』, 65ページ。
- 76) 同書, 72ページ。
- 77) 『黙移』, 181ページ。
- 78) 『穂高高原』, 170ページ。
- 79) 相馬愛蔵・黒光著作集刊行委員会編『相馬愛蔵・黒光著作集 2 一人人として・夫婦教育』(以下『一人人として・夫婦教育』) 郷土出版社, 1981年, 126ページ。
- 80) 斉藤茂・横内三直編『井口喜源治』井口喜源治記念館, 1978年(改訂再版), 93ページ。
- 81) 南安曇教育会・井口喜源治研究委員会編『井口喜源治と研成義塾』南安曇教育会, 1981年, 192ページ。
- 82) 『穂高高原』, 237ページ。
- 83) 南安曇教育会・井口喜源治研究委員会編『井口喜源治と研成義塾』, 243~246ページ。

- 84) 齊藤茂・横内三直編『井口喜源治』, 36ページ。
- 85) 南安曇教育会・井口喜源治研究委員会編『井口喜源治と研成義塾』, 265ページ。
- 86) 井口が昭和7年10月20日, 脳溢血症で倒れたことによって, 事実上塾の存立不可能となったのであるが, 病臥にあっても, 井口ある以上, 研成義塾は存続していると思われ, 昭和13年3月29日の「廃校届」の認可をもって「廃校」と考える。齊藤茂・横内三直編『井口喜源治』, 6ページ。
- 87) 南安曇教育会, 井口喜源治研究委員会編『井口喜源治と研成義塾』, 262ページ。
- 88) 『黙移』, 184ページ。
- 89) 『穂高高原』, 173ページ。
- 90) 同書, 194ページ。
- 91) 荻原守衛著・杉井六郎編『礪山日記つくまのなべ』, 295ページ。
- 92) 『黙移』, 184ページ。
- 93) 山田貞光著「相馬家の人たち—相馬愛蔵・黒光を中心として—」(『松本平におけるキリスト教—井口喜源治と研成義塾—』所収) 同朋舎出版, 1979年, 223ページ。
- 94) 『穂高高原』, 231ページ。
- 95) 愛蔵は北海道より帰郷後, 養蚕, 蚕種の研究に携わり, 明治27年『蚕種製造論』(経済雑誌社刊行), 明治33年『秋蚕飼育法』(蚕業新報社刊行)の著書, 又, 専門雑誌に数篇の論文を発表し, 更に, 全国の養蚕家の指導を行うなど, 養蚕・蚕種の研究, 実践に貢献した。
- 96) 『一商人として・夫婦教育』, 14ページ。
- 97) 同書, 12ページ。
- 98) 『穂高高原』, 234ページ。
- 99) 『一商人として・夫婦教育』, 12ページ。
- 100) 『黙移』, 186ページ。
- 101) 『一商人として・夫婦教育』, 15ページ。
- 102) 同ページ。
- 103) 同書, 16ページ。
- 104) 同書, 65ページ。
- 105) 同書, 18ページ。
- 106) 相馬愛蔵・黒光著作集刊行委員会編『相馬愛蔵・黒光著作集4 私の小売商道』郷土出版社, 1981年, 53ページ。
- 107) 『一商人として・夫婦教育』, 109~111ページ。
- 108) 同書, 112~114ページ。愛蔵・黒光夫妻は少年店員に勉学の道を開くために, 昭和12年5月, 「研成学院」を開校した。
- 109) 『黙移』, 238ページ。
- 110) 仁科惇著『礪山荻原守衛』柳沢書苑, 1967年, 242~243ページ。
- 111) 島本久恵著『明治の女性たち』, 336ページ。

- 112) 南安曇教育会・井口喜源治研究委員会編『井口喜源治と研成義塾』, 269ページ。
- 113) 『穂高原』, 249ページ。長男安雄の籍を「穂高」の相馬家に入れ、彼を家督相続人とすることを安兵衛夫婦は要求していた。
- 114) 仁科惇著『礪山萩原守衛』, 244ページ。
- 115) 『穂高原』, 160ページ。
- 116) 『黙移』, 240ページ。
- 117) 同ページ。
- 118) 同書, 242～243ページ。
- 119) 同書, 243ページ。
- 120) 南安曇教育会・井口喜源治研究委員会編『井口喜源治と研成義塾』, 758ページ。
- 121) 同書, 761ページ。
- 122) 同書, 762ページ。
- 123) 木下尚江著「野人語第3」(『木下尚江著作集第12巻』所収) 明治文献, 1969年, 51ページ。
- 124) 木下尚江著「創造」(『木下尚江著作集第12巻』所収), 91ページ。
- 125) 『黙移』, 246ページ。
- 126) 同書, 255ページ。
- 127) 松本健一著『ドストエフスキと日本人』朝日新聞社, 1975年, 10～13ページ。
- 128) 『黙移』, 273ページ。
- 129) 同書, 274ページ。
- 130) 同書, 276ページ。
- 131) 株式会社中村屋編『相馬愛蔵・黒光のあゆみ』株式会社中村屋, 1968年, 45ページ。
- 132) 島本久恵著『俚譜薔薇来歌』筑摩書房, 1983年, 584ページ。
- 133) 田村圓澄著『日本仏教思想史研究浄土教篇』平楽寺書店, 1959年, 149ページ。181ページ。
- 134) 同書, 246ページ。
- 135) 『黙移』, 334ページ。